

かかわり合いにより多面的・多角的な見方を広げ、社会認識を深める子どもの育成

— 中学2年生「近代の日本と世界～欧米に追いつけ追い越せ～」の実践から —

1. 授業の構想

(1) 社会科で考える思考力・判断力・表現力と本単元のかかわり

附属学校園社会科部では、昨年度より社会認識の育成をめざす実践に取り組んでいる。その手立ては教科構想で述べているように『「習得」すべき知識・技能を明らかにする』『知識・技能を「活用」して思考力、判断力、表現力を育てる学習活動を設定する』『「中核となる視点」を見つけ「探究」する学びにつながる単元を構想する』の3点である。それを実現するための具体的な実践として、歴史分野では次の3点をおこなってきた。

①「中核となる視点」を明確にした単元構成：古代の律令制と中世後半（おもに室町時代）の単元で、「中核となる視点」を明確にした単元構成に基づき社会認識を深める授業を実践した。

②「時代を大観し表現する活動」：「中核となる視点」を明確にした単元構成で、社会認識を育成する授業実践をおこなえば、歴史を構造的に解釈し時代を大きくとらえることができると考え、とくに単元の学習の最初に、時代の特色をとらえ時代を大観する活動を取り入れてきた。これより今後学習する時代に対して「〇〇時代は△△な時代だったのでないだろうか」というイメージ（課題意識）を形成し学習をすすめた。

③資料の活用：生徒が事象を関連づけ、意味づけをおこない構造的に歴史をとらえるためには、資料の活用が効果的である。視覚資料を用いて子どもたちの認識の構造化を助け、「〇〇の時代ではないか」「〇〇であってほしい」といった感覚的認識の段階から、根拠をもった認識に引き上げていくためにも資料の活用は重要である。歴史の学習では、その時代の特色をよく反映している資料として、帝国書院のイラスト『タイムスリップ』を活用した。最初は事実の読み取りから始まり、前時代との比較など単元の中心資料として年間を通しての活用を工夫した。

今年度は、昨年度の実践をふまえたうえで、思考力・判断力・表現力の育成と系統立てた資料活用技能の育成に重点を置き、社会認識の構造化をめざしたいと考えている。社会科部の歴史分野で考える思考力とは、歴史的事象どうしを関連づけ、意味づけをおこないながら知識をネットワーク化させ、その時代の特色を理解し歴史の大きな流れをつかむことができる力と考える。そのためには多面的・多角的な歴史の見方が必要である。判断力は、他者とのかかわりによって様々な意見を知ること、公正なものを見方を培い、歴史的事象に価値づけをおこなうことのできる力と考える。表現力は、思考し判断したことを、根拠をもって相手にわかりやすく伝える力と考える。新学習指導要領でも歴史分野において「思考力・判断力・表現力」を育成する視点として、説明・追及・意見交換などの学習活動があげられているように、他者とかかわり合いが有効な手だてであると考えられる。

本単元は、「新学習指導要領」歴史分野（ウ）「近代の日本と世界」の部分である。従来では近現代として1つの大項目として扱われていたが、近現代史の一層の充実のため今回の改定で近代史と現代史とに分け、開国前から第二次世界大戦終結までを近代史の内容としている。大項目である近代史をいくつかの小単元にわけ、ここでは明治の始まりから立憲国家の成立までを本単元として扱う。

本単元では、明治維新以後の日本の歴史を世界の動きとの関係の中で取り上げている。この時代の日本の歴史は外圧による開国以来、常に欧米列強・アジアとの密接な関わりをもちながら進展してきた。日本は欧米社会をモデルとしてアジアの中でいち早く近代化に成功し、近代国家のしくみを整え、産業や文化を著しく発展させてきたといえる。この時代をとらえるためには、複雑な世界情勢に加え、政府にアジア・欧米社会はどのように映りどのように対処したのか、民衆にとっての明治維新とは何であったのか、または欧米・アジアからは日本の社会はどのように映ったのか、等のまさに多面的・多角的な視点から考察しなくてはならない。

この時代をとらえるためには大きく3つの視点があると考えられる。1つ目は、欧米のアジアを見る視点

である。欧米列強による植民地支配が加速される中で、アジアは遅れた風俗習慣の状態であり、そういった未開の人々を文明化させることが、さきに文明化を果たした欧米列強の使命であると主張され始める。もちろんこれは植民地支配を正当化するためにうたわれたものであり、倫理観からいって正しいものであるとはいえない。日本を訪れた欧米人の中に、日本の文化に感銘したものがいたことは事実であるが、多くの欧米人の目に、日本の社会は制度・風俗などが文明的でない映った。よって、独立を保っているものの、不平等条約も仕方がないとの見解が主流であった。

2つ目は、明治政府の思いである。政府による急激な近代化は、上記のような欧米のアジア・日本の見方を意識したものであった。「欧米列強に認められたい」「欧米の仲間入りを果たしたい」そして「日本の独立を守りたい」という思いが、近代化の大きな牽引力となった。この急激な近代化は、経済的に見ればそれ以前の高度な手工業技術、生産方法、あるいは商業、信用経済の発達や、高いレベルの読み書きそろばんの能力をもつ一般市民という基盤に支えられていた。決して「一新」ではない。しかし、明治政府は江戸時代を全面的に否定して、欧米の諸制度を全力で受容した。そして、「日本人」「日本国」の像を日本人の意識の中に刷り込んでいった。これらにより、アイヌ・琉球の民族的個性が失われ、中国・朝鮮の人々の蔑視につながっていった。そのような視点で、明治の諸改革・諸制度を見ると、均質的な国民の形成や富国強兵といったキーワードにつながる。しかしそうすると政府の政策に矛盾が生じる。欧米を意識して公議を掲げるが、大久保利通が「公議所など無用の論多く、未だ今日の御国体では適用できない」（大久保書簡）と述べているように、近代化を政府によって進めるためには、専制的な要素ももっていた。その矛盾をめぐる政府内にも意見の分かれが生じる。めざすものは近代国家であるが、その過程が違うのである。自由民権運動もその1つである。それらは、民衆の思いともつながり、一層複雑なものとなる。

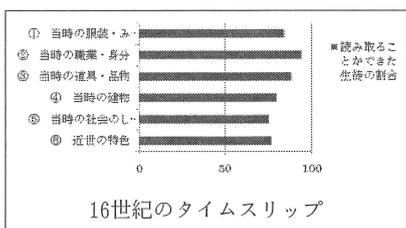
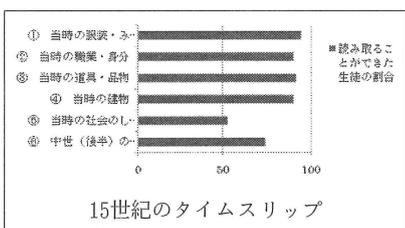
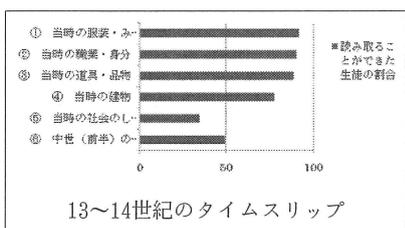
3つ目は、民衆から見た明治維新である。幕末の混乱の中で、民衆の間には「世直し」を期待する声が高まった。新しい時代、豊かな時代の到来を望んでいた。そのような民衆にとって開化政策は、旧来の風習を禁止し、負担の増加する政策も多く強制といった色彩が濃かった。四民平等、職業の自由、あるいはガス灯や煉瓦といった明るく華やかなイメージだけで文明開化期をとらえると、当時の民衆からは離れてしまう。まさに複数の価値観の中で、人々が模索し続けた時代である。

これから先、子どもたちは結論の見えない様々な課題にぶつかり、自分と意見の異なる人とコミュニケーションをとりながら問題に対処し、社会に参画していかななくてはいけない。本単元では、資料の活用を工夫し、友達とのかかわりを組み込んだ学習活動を取り入れることで、多面的・多角的な思考から社会認識の育成を図りたい。

(2) 子どものとらえと単元の構成

将軍の権力が弱かった。そのうらで文化が発展し、庶民もその文化に参加できるようになった。貿易が盛んになり、お金持ちが増えた時代で、その分、貧富の差も広がった。政治の力が弱く、争いが絶えなかったため、自分の身は自分で守る時代だった。将軍や庶民、関係なく一人一人が輝けた時代であった。

上記は、14世紀から15世紀にかけての中世後半（おもに室町時代）の単元で、社会認識を深める授業実践をおこなったとき、室町時代についてA児がまとめたものである。この中にある、「自分の身は自分で守る時代」というのは、室町時代の特色を理解しそれを表した言葉といえる。また、以下のグラフは昨年度の歴史学習で活用してきたイラスト「タイムスリップ」に対する生徒の認識の変化である。



授業では、タイムスリップからの読み取りや比較など中心資料として活用してきた。それにより、最初は事実を中心に読み取っていた生徒も、次第に社会のしくみや時代の特色を読み取っていった。時代の特色を掴む上での有効な資料といえる。また、回を重ねるごとに生徒たちの意識の中に、「タイムスリップからの読みとり」＝「時代を大観する」＝「今後の学習の課題設定」といったタイムスリップを使った学習活動が定着した。よって、このような子どもたちが、さらに多面的・多角的な視点から物事を考え、社会認識を育成していくために本単元では3つの手立てをおこなった。

まず1つ目は、「中核となる視点」を明確にした単元構成である。今回、この時代を掴むための視点を「遅れた国、日本～欧米から見た日本～」「日本の独立を守るために～政府の願い～」「新しい国に期待する国民～民衆の思い～」「一等国への仲間入り～様々な人々の思い～」とし、それぞれ生徒が習得すべき知識を明確にした単元構成をおこなった。(以下、単元構成参照)。

2つ目は、視点を変えた資料の見方により多角的な考察を培う。中心資料としてはタイムスリップ近現代①[19世紀後半]を用いる。この資料は、文明開化の様子を伝える錦絵で、従来からもこの時代の学習でよく扱われていたものである。生徒たちも小学校での学習で、この資料と江戸時代の資料を比較して読み取る学習はおこなっている。今回は、「欧米の人々から」の視点でこの資料と江戸時代のタイムスリップとを比較した。これにより欧米のアジア・日本を見る視点に気づかせ、アジアの国々が植民地化されている状況とこの視点が結びつけば、世界情勢の中で日本がどのような危機に直面していたか理解できると思われる。そして、政府の諸政策が欧米の国々を意識した改革であるという視点は、単元の学習をすすめていく上での重要な1つの柱だと考え、タイムスリップを用いたこの学習で生徒にしっかりと意識させた。さらには、政府の諸政策を見ていく上では勅諭や建白書を使い、政府がどのような国づくりをめざしたのか具体的に考えさせた。そして、江戸時代の政策と比較することで、明治政府の政策が中央集権や均質的国民の形成、ひいては富国強兵をめざしたものであることを明らかにしていった。

3つ目は、話し合い活動を取り入れ自分たちの考えをまとめそれを劇化する活動を取り入れたことである。本単元でめざす思考力、判断力、表現力は社会認識の深まりを土台として育まれるものである。そのためにはまず既習事項を土台としてしっかりもち、その上で、自分で検証し自分の言葉で伝え合いシナリオを練っていかなくてはならない。よって、この活動は社会認識の深まりつつある単元の終結部においておこない、より一層の社会認識の深まりをめざすものである。劇「国会ができるまで」を、「国会は時期尚早」と考える政府と「すぐに国会を」と考える民権派のどちらかの意見にたって各グループにシナリオを考えさせ発表させる。立憲国家が成立するまでの過程は、先に述べたように複数の価値感が存在し、その中でよりよい社会をめざして人々が模索し続けた過程である。非常に複雑で難しい問題を抱えた部分である。まずは各自で、政府の主張と民権派の主張のどちらに賛成するのか教科書や資料集、それまでに学習した内容をもとに考え意見をまとめる。さらには同じ考えの者とグループになり意見交換をしながら思考を深め5分間の劇のシナリオをつくる。グループで意見をまとめる過程で、他者の意見を聴き自分の意見をわかりやすく伝える活動を通じて、自分自身の考えを深めていくものと考ええる。次にはその活動をクラスに広げ、自分たちとは違う考えを知ること、さらに認識を深めさせた。

2. 活動展開計画 (12時間)

次	テーマ	時間	学習問題と学習活動	評価
1次	遅れた国、日本～欧米から見た日本～	1	<ul style="list-style-type: none"> ○政府はなぜ欧米化(近代化)を急いだのだろうか。 ・イラスト「タイムスリップ19世紀後半」から近代はどのような社会になっていくのか、予想してみよう。 ・近世と近代社会は、それぞれ欧米の人々にどのように映ったのか考えよう。 ・政府の思い(願い)に気づき、政府がめざした国づくりについて考えよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・近代への関心を高め、意欲的に仮説をたてることができる。 ・多面的・多角的な見方ができる。 <p>[関・意] [資料活用] (ワークシート・発表)</p>

(2) 4次での認識の深まり

①個人で民権派か政府派か考える（第1～2時）

自由民権運動がおこり、当時の国内には「国会の早期開催」を求める民権派と「国会は時期尚早」と考える政府派の大きく2つの意見があった。両派とも日本を近代的で豊かな国にしたいという最終的な目標は同じであるが、その方向性が違うのである。

★両派の主な主張

<p>民権派（今すぐ国会を）</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎未開の国民にも権利がある。 ◎政治に参加させることで、国民の意識も高まる。 ◎民主主義の国をつくるのが、日本を守ることにつながる。 	<p>政府派（国会はまだ早い）</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎これだけ政府の政策に反対している国民を政治に参加させたら、改革がストップしてしまう。 ◎我が国の国民は、知識がまだ十分でない。 ◎いち早く近代化して、欧米に追い付きたい。
---	--

上記のような当時の主張や今までに学習したことを踏まえて、今の時点でどちらの意見をより支持するのか、生徒一人ひとりに考えさせその理由を書かせた。

右の表は、各クラスの民権派・政府派の人数と、それをもとにしたグループ編成を表している。以下は、民権派、政府派の何人かの生徒の意見である。

	民権派		政府派	
	人数	班	人数	班
1組	30	6	5	1
2組	26	6	9	2
3組	26	6	9	2
4組	25	5	10	2

B児（民権派）
 まずは国会をつくって藩閥政治を終わらせることが大切だと思う。開くのが遅くなればなるほど、民主主義の国づくりも遅くなると思う。

C児（民権派）
 皆の意見を聞くことは大切だ。国は政府だけのものじゃないから国民にも決める権利はある。

D児（政府派）
 知識が十分でない国民を政治に参加させても、自分たちの損得で動くため日本に一番善い政策が実行できないのではないかな。

②劇の台本作成（第3～4時）

1班4～5人のグループで5分間の劇のシナリオをつくる。場面は国会開設に向けての討論会。民権派グループは、自分たちの主張を政府派・聴衆に納得してもらえそうなシナリオを考え、政府派グループは、自分たちの主張を民権派・聴衆に納得してもらえそうなシナリオを考える。教科書、資料集を用いて、これまで学習した内容をもとにグループで話し合い自説を補強し各グループでシナリオをつくった。以下は、この学習を終えたときの上記3人の生徒のふりかえりである。

B児（民権派）
 みんなで話し合うことによって、深く考えることができよくわかるようになりました。民権派・政府派、どちらの意見も筋が通っていて、難しいと思うこともありましたが、やはり民権派が正しいと思います。

C児（民権派）
 皆で話し合っているうちに分からなくなってきました。最初は100%民権派でしたが、話し合うことによっていろいろな知識が入り"直感"ではなく、深く考えるうちに政府の考えも正しいような気がしてきました。民権派か政府か、当時の人も私と同じようなことを思った人がいたのではないかな、と思います。

D児（政府派）
 劇の台本をつくる時、皆と話し合いながら書いていくと「政府側にはこんな考えもあったのだ」と気付くことがたくさんありました。そして、政府側の意見の人ばかりと話し合っているの、民権派のグループの考えが知りたいと思いました。

このように、劇のシナリオづくりの学習を終えての生徒の感想は大きく3パターンあった。1つはB児のように、他者と意見を交わすことで自説を補強し思考を深める生徒。2つ目は、C児のように他者

と意見を交わし考えれば考えるほど、さまざまな意見があることに気づき思考を深める生徒。実際に、話し合っているうちに民権派から政府派に変わったグループが1つあり、そこまでの変化はなくとも、「どちらも正しい」「考えれば考えるほど難しい」といったふりかえりが多くあった。3つ目はD児のように、話し合ってから思考が深まり、さらに「違う意見が知りたい」という考えが強まっている生徒。いずれにせよ他に学ぶ姿勢や歴史認識の深まりが確認できたと思う。

③発表会（第5時）

それまでの学習が、同じ考えをもつ者どうしでのシナリオづくりであったので、発表会での違う立場からつくった劇の鑑賞は、これまでの見方・考え方をゆさぶる活動である。

劇の鑑賞を終えての上記3人の生徒のふりかえりである。

B児（民権派）

民権派の意見はもちろん、政府側の意見にもとても説得力がありました。国民にはまだ知識が足りないから、国会を開設しても世界のことを目を向けず目先の損得で決めるという意見は、そうかも・・・と思いました。しかし、それでも国民が政治に参加することで政治への関心が高まるし、自分の国のことだからしっかり考える国民もたくさんいると思います。私は、民権派が主張するようなことがこれからの政治には必要だと思います。

C児（民権派）

劇を鑑賞していたら、政府かなと意見が変わってきました。中途半端な近代化の時期に、そんなに急いで国会を開かなくてもいいと思ったからです。最初は100%民権派でしたが、今は80%が政府派で、20%が民権派かなと、思うようになりました。

D児（政府派）

今までは、政府派の人たちとばかり話し合っていたので、考えの深まりにも限界があると思っていました。民権派の意見は、今までなぜ良いのか分かりませんでした。今日の民権派グループの劇で「国民にも権利がある」「国民を第一に考えないと改革も上手くいかない」ということがわかりました。今日の劇を鑑賞して、自分自身の考えもずいぶん深まったと思います。

劇のシナリオづくりを終えての生徒のふりかえりと同じように、自分自身の自説を補強し「やはり民権派」「やはり政府派」と思いを強める生徒と、劇を鑑賞して他の意見を知れば知るほど決めかねる生徒に分かれた。しかし両者に言えることは、自分たちとは異なるグループの意見を知ること、一方的な見方だけではなく、政府の視点からも民衆の視点からも、そして欧米の視点からも考えることができるようになり認識が深まったと思われる。

4. 成果と課題

この単元を構成するにあたり、この明治期の政府による急速な近代化の「牽引力」になった政府の思いをどう生徒にとらえさせるかを考えた。「欧米に追いつきたい」「日本の独立を守りたい」という政府の思いに気づかせるために、「欧米の人々から」の視点で近代のタイムスリップと江戸時代のタイムスリップとを比較し考えさせた。今までにないタイムスリップの活用の仕方であったが、生徒の課題意識の形成には有効であった。また、劇のシナリオづくりと劇の鑑賞によって、明治期の認識を深め、よりこの時代を理解することができた。他者と意見をかわしシナリオを練っていく段階で、多くの生徒が「よく考えた」とふりかえっていった。これは、自分たちで根拠をもった台本に仕上げていくために意見を交わし考えていったからであろう。そして、劇を鑑賞した後には、「今まで気づかなかったことに気づけた」というふりかえりが多くあった。実際、劇をつくり、演じ鑑賞する学習には通常よりも多くの時間を要する。毎回の単元では無理である。しかし、こういった経験が大切であり、この経験がなければ得られない力があり、年間の学習の中で計画的にこのような単元を組む必要があると感じた。

（文責 前島美佐江）